〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(31)〉

保育園・幼稚園と親のかかわりを考える

小玉亮子

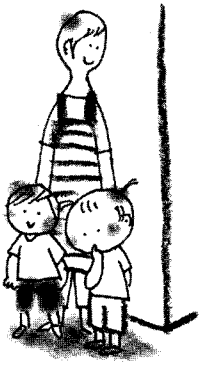
保育園爆破予告事件

ちょうど、9・11を経てイラク戦争に今まさに、突入しようという二〇〇三年の冬のことです。私はミネソタ大学に客員研究員として滞在していたのですが、次は、そのときに遭遇した事件（?）です。

娘を保育園に迎えに行くと、立ち入り禁止となっていて、慌てて子どもたちを捜したところ、少し離れた建物の陰に保育士さんと一緒に子どもたちが立っており、親たちのお迎えを待っていました。娘は、「お部屋に、パピィを置いてきてしまったけど、大丈夫かな」と言うのです。保育士の先生や親たちの話を総合してなんとなく理解できたのは、保育園に爆破予告の電話があって、子どもたちが建物からの退去を求められ、お迎えにいったときには、爆発物がないことの確認作業中だったということでした。ううむ、さすがアメリカだ、事件の起こり方が違うなあ、などど、親のほうは感心などをし、娘はというと、お気に入りのぬいぐるみを部屋に置いてきたことだけが気がかりだったという、全くのんきな外国人の親子だったと思います。

で、結局、爆発物はみつからず、ただのいたずら電話だろう、ということで、この事件は終止符をうち、何事もなかったように、翌日から通常通りの保育が始まりました。

本誌一〇八巻第二号（二〇〇九年二月発行）で塩崎美穂さんが紹介されたミネソタ大学内の二つの保育園に加えて、以下で、もう一つミネソタ大学内にあった保育園を紹介したいと思います。それが、この娘の通った保育園（写真1、Como Community Child Care 以下CCCCと表記。Cが四つです）です。この保育園は他の二つの保育園と比べ以下のような特色があります。それは、この保育園が、家族を持つミネソタ大学の学生たちのためのレジデンスが立ち並ぶ中にあり、学生の子どもたちの入所を第一に想定して造られた保育園で、その運営が学生である親たちの主導でなされているという点です。



今回、この保育園を紹介しようと考えた理由は、昨年、お茶の水女子大学の保育園である「いずみナーサリー」に、現在子どもを預けている親、また、預けたことのある親の皆さんから、話を聞く機会があったのを受けて（二〇〇八年六月十七日）、「保育園・幼稚園と親のかかわり」というテーマについて、改めて考えてみたいと思ったからです。このテーマを設定したときに、大学内の保育園の一つの例として、ミネソタ大学のCCCCの在り方は興味深いのではないかと思い、紹介しようと考えました。

保育園運営委員会会議

CCCCでは、毎日、一枚の白い紙をやり取りします。朝、親が子どもの状態やお迎えの時間を書き、裏

に保育士が一日の子どもの様子を記録します。迎えに行くときにその紙を保育士からもらって帰るのですが、それに、毎月一枚の運営委員会の開催を知らせるカラーの紙が加わります。

運営委員会は、親であれば誰でも参加できるということでしたので、このミーティングに参加してみました。そこでは、保育園の運営に関するありとあらゆることが議論されていました。議事次第には、会計、スタッフの人事、子どもの登録・退園、カリキュラムに至るまで書かれてあります。私が出席した九月の委員会では、年度の変わり目だったこともあって、会計報告をはじめ、八月でやめた子ども（なぜやめたのか含めて）、九月に新しく来た子どもの報告があり、またスタッフの移動についての説明が詳細になされていました。この保育園では、三つの部屋に子どもたちが分かれていたのですが、〇～二歳のクラスは満員で待機児が十名、二～四歳クラスと四歳以上クラスには欠員があるという状況でした。スタッフに、フルタイムとパートタイムがいるように、子どもたちにも、フルタイムとパートタイムの子どもがいました。登園時間もまちまちで学校の前後にやってくる学童さんの小学生もいました。

この会議で委員会の中心となっていたのが、のちに娘の親友となる男の子の父親で、三十代の学生の方でした。ほかの親たちも二十代から四十代までさまざまで、親の片方が学生で、片方が職を持っているというケースも多く、また、必ずしも学生でなくても子どもが通うことができたので、私のように客員研究員とし

▲写真１：Como Community Child Care の園庭
(http://www.comoccc.com/ 2009.3.3)

てミネソタ大学に一時的に来ているという立場でも、問題なく子どもを入園させることができました。

予算や施設管理については大学が支援していましたし、また保育園の建物の半分は、学生の家族寮の運営など学生のための施設なので、保育園が孤立していたわけではありません。ただ、運営の主体はあくまで親たちでした。

こういう運営形態は、ちょうど、日本の共同保育の形態と似通っていると思います。六十年代、七十年代の日本は、高度成長期のただ中にあって、「ポストの数ほど保育所を」というかけ声もあったほど、保育所の不足が問題となっていたのですが、そんな中、保育を必要としている親たちが集まって、親たちが共同で保育をしようという形が作り上げられました。そういう共同保育の場では、親の一人が話し合いで、時にはくじ引きで代表になったりしながら、運営が行われてきました。ミネソタ大学のCCCCには、親とは別に管理運営を担当するエグゼクティブ・ディレクターがいたのですが、彼女が産休をとったときには、運営委員の一人である子どもの母親が、代理のディレクターになっていました。こういう点からもCCCCは、親たちによって運営された保育園といっていいと思います。

ダイバーシティという哲学

この保育園での保育が素晴らしいものであったか、といわれると、正直、判断が難しいところです。小さな保育園で、施設も必ずしも十分なものではなく、保育士さんたちの異動も多く、疑問に感じる点も少なくはありませんでした。しかし、この保育園にはダイバーシティ（diversity・多様性）という哲学があり、それが実現されていたことは、注目されてよいと思っています。

入所の手続きの際に渡された『ペアレント・ポリシー・ハンドブック』にはこう書かれてあります。「CCCCは、多様なクライアントに応えます。なぜ

なら、子どもの親たちのほとんどが学生であるという学生の組織として、ミネソタ大学と共にあり、その中に位置するからです。学生である親たちにはさまざまな家族ニーズがあります。収入、エスニシティ、ライフスタイルの選択など。私たちはこういったダイバーシティを心から歓迎します。そして、それがここでの子どもたちが受けるケアの質に決定的に重要であると信じます」。

学生の家族寮には、留学生がたくさんいました。中米からの留学生の奥さんが、保育の補助に来ていたのですが、彼女から教えてもらって娘は、「ウーノ、ドゥース、トレス」と、たどたどしいスペイン語で数を言うことができるようになりました。また、娘の折った折り紙が、長い間部屋に飾られていたことは言うまでもありません。

そういう環境の中で、娘が書いた一枚の絵は、とても印象的でした。そこに子どもが何人か描かれてあったのですが、その一人の顔を娘は茶色で塗りました。娘によれば、黒人の子どもだと言うのです。彼女のクラスには黒人の男の子がいたのですが、それまで、絵を描くとき、肌色でしか顔を塗らなかった娘の意識の中に、いろいろな子どもがいる＝ダイバーシティが、確かに認識されたのだと思い、とてもうれしくなりました。

アメリカでは、階層によって住む場所が違います。郊外の住宅地には白人中間層が住み、彼らは大学に入学するまで黒人と会話をしたことがない、ということもまれではないそうです。他方、ダウンタウンには貧しい多様な民族の人々が住むことが多く、ミネソタ大学はダウンタウンに近接し、学生の家族寮もその近くでした。そういったロケーションも保育園が多様なエスニシティ（いわゆる民族や人種など）の家族が集う場となった背景にあると思います。

また、家族をもって学生を続けるということは、収入の面でもさまざまで、ライフスタイルもいろいろでした。

娘の友達のダンスの上手な陽気な父親は、長く職がないとのことで、離婚したばかりの父親と母親が交互に迎えに来ている友達もいました。また、別居した両親のもとを一週間ごとに過ごしていた友達は、隔週ごとに、CCCCに登園していました。

そういう家族の多様性や、子どもの多様性に確実に応えながら、そこで大切にされたのは、子ども一人ひとりの個性（individual）でした。『ペアレント・ポリシー・ハンドブック』では、「異なったように、異なったスピードで、異なった方法で」、「子どもたちの中に積極的な自己像（self-concept）」をはぐくみ、「子どもたちは、理解すること、関わること、支えられることで自己訓練（self-discipline）を学び」、「できることをできるだけ自分でやることによって、自信（self-reliance）がつくこと」が重視されると明記されています。個を重視する姿勢が、多様性を尊重する姿勢と密接に結びつき、保育が行われていたといえると思います。

終わりに

保育園爆破予告電話などということは、セキュリティの強化された白人地区といった郊外では起こらない事件だったのかもしれません。しかし、CCCCでの経験は、娘にとって確実に意義のあるものだったと思います。

また、CCCCの家族の多様性を尊重する姿勢が、子どもの親と家族を信じる姿勢と結び付いていたことや、同じように子どもの個を尊重する姿勢が、子どもを信じる姿勢と結び付いていたことはとても印象的で、私も多くのことを学ぶことができました。

親を支援の対象としてのみ見る姿勢とは全く逆に、親たち自身によって創り出されたCCCCで行われていた保育が、同時に、子どもたちを信じる保育でもあったことは、保育園・幼稚園と親とのかかわりを考えるとき、とても示唆的であるように思われるのです。

（お茶の水女子大学）